

カラマツ林、山の香り
変化する山の表情に
魅せられています
この美しい山を守り
次代に引き継ぎます



大西理恵さん

有限会社大原林産 おっぼら 取締役社長
岐阜県郡上市

自衛隊から林業の世界へ。「緑を守り水を創る」を社是とし、社員に全幅の信頼を寄せ、美しい森林を次代へ引き継ぐため、山を管理します。林業界が直面する課題に地域と共に取り組みんでいます。





P19:雪の中でスタッフの山仕事を確認。終わって、ほっと一息。木材の仮置き場である土場で深呼吸する大西理恵さん P20:斜面で、木の切り方を説明する理恵さん(右上) フォワードを操る岡田さんは、チームリーダー(右下) チェーンソーで受け口を切る山田さん。受け口方向に木が倒れる(左上) プロセッサが枝を払い丸太に切断していく(左下)

父の跡を継ぎ林業の世界へ

岐阜県郡上市を出発して車で山の中を縫って走ること、1時間余り。辺りには綿をちぎったような雪が後から後から舞い降りてきて、窓の外は白銀一色の世界だ。

「昨日は少し降ったけど、すぐにやんでシカが走り回っていました。あっという間に冬將軍到来です。それにしても、雪の量がすごいわ。上った先が現場ですけど——ここ登れるかしら」と大西理恵さん(53歳)。うまくギアチェンジをしながら坂を上っていくと「ここから高山市で、国有林になります。標高が高いから木が変わって、カラマツが多いんです。明るくなつたでしょ。私、カラマツ林が一番美しいなって思います」

理恵さんは、有限会社大原林産の取締役社長だ。「大原と書いて『オッパラ』と読むんです」

もともとは父の親友が、岐阜県大野郡清見村大原(現・高山市)で始めた事業が母体だったのだという。親友の死後、父が社名「オッパラ」と共に事業を引き継ぎ、有限会社大原林産を設立した。ところが父の片腕だった兄が42歳で逝去。「手伝ってくれ」と父から懇願され、乳飲み子を抱えた理恵さんが事務を引き継いだのは2007年。12年に専務取締役となり、17年からは取締役社長を務める。

仕事は、事務所では事業計画を立てることが中心で、所有者への折衝をはじめ、国有林の森林整備請負の入札も大事な仕事の一部。



切り出した原木丸太を林道端まで運んでいき、土場にストック。運送業者が市場へ搬出する。外注の運送業者も、貴重なスタッフの一員(上) 現場は、こんなにすごい斜面。プロフェッショナルな技術者たちの仕事によって森が営まれていく(右下) 美しく積んであることで定評がある大原林産の土場は、70代の三輪さんの仕事だ(左下)

大原林産では、仕事の7割が国有林請負事業で、地域の山で育った木は、建築材料活用などのために市場に納材する。

国有林は、以前は指名業者の委託だったが、現在は一般競争入札制度になって、入札がおこなわれる。今回の現場は、24年4月に入札して大原林産が落札、契約した場所だ。

社員に支えられて

「山へは、進捗状況の確認に適宜、足を運びます」

そう言いながら、車を降りるや、慣れない雪道にあたふたしている取材陣を尻目に、脱兎のごとき足取りで、理恵さんは現場へ向かった。雪をかぶった林の中には、スタッフが4人。樹木の間に、鮮やかな色の大きな重機が4台見える。

ギーギーとチェーンソーの音が響き渡る。木を切っているのは、山田さんだ。

「ここは勾配が25%ほどです。まず樹木が倒れる側にチェーンソーで、受け口を切り込み、反対側から追い口と呼ぶ切り込みを入れます。伝統的な倒し方ですが、狙った方向にうまく倒れるよう制御します。こういう斜面で切るにはセンスが必要で、先を想像しながら仕事をしないと、林業はできません」と理恵さん。

ものすごい音がとどろき、地響きと共に木が倒れる。プロセッサーを操り倒れた長い木の枝を払い4人余りに切りそろえていく。「江崎君は20代ですが、若いけれどいつも

「落ち着いているうえ、なんでもできる子なんです」

「ダツダツと重い音をさせながら動き始めているのはフォワーダ。ブワーン、ブワーンと集材作業をして、少し離れた土場へ運んでいく。この重機を使いこなす岡田さんは、40代。なんと水族館の飼育員を経て林業に転業したという変わり種だ。」

大原林産の社是は「緑を守り水を創る」。



父から受け継いだ事業所だが、事務所は、理恵さんがリフォーム。デザインガラスを入れた青いドアや丸い看板も若々しく、室内も優しい印象

自分たちの仕事が治山、水源涵養につながることを意識して仕事に携わりたいという先代からの姿勢だ。

「岡田君は、京都府出身ですが、環境汚染を考えるうちに水が大事だと思いついて、林業をやりたいからと来てくれました。器用で人柄もいい。頼りになる存在です」

そして父の代からのベテラン三輪さんは集材作業の中心者。木材は、仕分けをして土

場に積み上げてある。大原林産の美しい積み上げ方は、トラック運転手の間でも評判だ。「みんな、それぞれ得意分野があつて、作業をうまく分担しています」

理恵さんの言葉から、スタッフたちへ厚い信頼を寄せていることが想像できる。

「私は、もともと林業を学んだわけではないので、山の仕事はできないんです。現場の力になりたいと、いつも思いますが、結局、みんなに支えてもらっています」

そんな理恵さんは、衛星を利用し位置情報が取得できるGNSS受信機を導入。山の中の測量で使っている。

山が抱える課題に向き合う

雪山での敏しような足の運び方に驚いたので、よもやスポーツ選手だったのか、と尋ねると思いがけない答えが返ってきた。高校卒業後に、自衛隊に入隊したのだという。

「親の世話にならずに生活することを考えたのですが、たまたま、父の友人に自衛官がいて、彼からよく話を聞いていたのです。自衛隊員になれば、お給料ももらえるし特別職国家公務員だし、自立できると思って」どこに配属されたんですか？

「埼玉県の朝霞駐屯地にいました。その後、静岡県の富士学校に3年半くらいです」

なんと武器隊に配属されていたという。「自衛隊にいたから山歩きは得意かもしれません（笑）」

岐阜県は県土の8割が森林で森林率は

全国2位。郡上市に至っては、総面積の9割を山が占める。関連団体も多く、大原林産も協会や組合に所属するが、理恵さんは、2024年4月から郡上市素材生産協議会の会長を務めている。父の事業を継いだ最初は事務の手伝いだったが、今や山林の現状や課題と直面する立場となった。

戦後の拡大造林で植林された木の伐採時期なのに、木材価格の低迷や労働力の減少と高齢化で造林の負担が大きく再造林が進まないなど問題は山積しているが「山の仕事は事故も多いので労働安全の勉強会を催したり、研修会を企画したりしています。郡上市では女性社長が3人いて、意見交換もしますが、頭を悩ませる問題が尽きません」

そんななかで、農学部へ進学して林学を学んでいる長女が相談にのってくれることが増えた。人材育成などをテーマに書いた彼女の論文も読んで、大いに参考にさせてもらった。長女が足を運んだ全国各地の林業事業体の話を聞くのも興味深い。聞くうちに、逆にこの土地の良さも見えてきて、癒される思いにもなるのだという。

「山って、行く度に表情が変わるんです。季節が移ると、山が放つ香りがすばらしい。心が満たされます」

その香りは自分だけにしか嗅ぐことができない。そんな時には、誰もが入れない場所という特別感もあつて、山の仕事のせいたくさと充実感を堪能できるとうれしそうだ。

（片柳草生／文 藤井 大介／撮影）